

## 思い込みのこわさ

24期 徳田完二

人間だれしも失敗をする。また、失敗の中には思い込みによるものが少なくないと思う。ここで私の失敗談の中から二つ紹介しよう。

十年以上前のある年、公務でアメリカ東海岸に行くことになった。時期は三月中旬。現地での宿泊は三泊の日程だった。初めの二泊は、同行者である同僚と同じところに泊まる必要があったので、勤務先の職員が宿所を手配してくれることになっていたが、三泊目は用務を終えた後の単独行動をする日だったので、自分でホテルを予約しなければならなかった。

さて、三月十五日の火曜日、三泊目のホテルでのことである。ニューヨークはマンハッタンのど真ん中に近いホテルだった。私はフロントに行き、今日の予約をしている者だと名前を告げた。ところが、ホテルマンはコンピュータのキーボードを叩いて予約を確認すると、そういう予約は入っていないと言うのである。そんなことはないはずだと、私はちょっと気色ばんだ感じで、ネット予約の画面をプリントアウトした紙を見せた。そこには「十五日の火曜日」に予約が完了し、料金も支払い済みである旨が明記されていた。ホテルマンはそれを見ると、心なしか気の毒そうな表情と口調でこう言った。

“February…”

私が予約したのは「二月十五日の火曜日」だったのである。閏年でない年は、二月と三月の日付と曜日の組み合わせが同じになるため、私は二月十五日の火曜日を三月十五日の火曜日だと思い込んで予約したのだった。Oh! My god! 希望のホテルに予約が取れるようにと、ひと月以上前に予約した「手回しのよさ」が災いした面もあるが、日付に間違いがないかしっかり確認することを怠らなければ防げた失敗だった。

ちょっとへこんだ私に、親切なホテルマンは、この予約で今夜泊まれるかどうか上に掛け合ってみると言ってくれて、いったん奥に引っ込んだ。が、戻ってくると、ダメだと言われた旨を告げた。部屋に空きがあったので泊まることはできたが、予約分の料金をわたしはふいにしたわけである。

二つ目の失敗は何か月前のこと。わが家のキッチンのガスレンジから「ピッ!」という警告音が断続的に聞こえるようになった。そればかりか、「電池切れです! 電池切れです!」というアナウンスも時々発せられた。そこで、買い置きしていた電池を入れたのだが、警告音とアナウンスは相変わらずなのである。買い置きの電池が古くなっていて、自然に電気が消耗したのかも知れないと思い、別の電池に変えてみたが、状況に変わりはない。仕方なく新しい電池を買いに行き、入れ直した。しかし、それでも変化がない。電池を装填する部分の接触が悪いのだろうかとか確かめてみたが、そんな様子もない。警告音が鳴りはするものの、ガス

の点火や燃焼に問題はないことから、電池切れを感知したり通知したりする機能が誤動作を起こしているのかも知れないとも考えた。修理することになれば面倒だなあと悩ましく思いながらガスレンジのパネルを眺めている時、その隅に貼られたシールにガス会社のコールセンターの連絡先が書いてあるのが目に止まった。

そこに電話をかけて状況を説明すると、対応した女性は「ガスレンジ以外の機器から音が出ているということはありませんか」と言う。「いえ。どう見てもガスレンジから音が出ています」と、ガスレンジの真ん前に座り込んだ格好で私はきっぱりと答えた。話をしている間にも「ピッ!」という警告音は何度か鳴った。製品の型番を聞かれたので伝え、「今から調べますので、しばらくお待ちください」とのことだった。

ややあって会話が再開した時、女性は言った。「その型番は、電池切れの時、警告ランプが点灯するだけで、音は出ない仕組みになっています」

えっ…? 衝撃を受けた私に、彼女はさらに言った。「音は周辺にある機器から出ているのではないのでしょうか」その言葉に反応して、私は座ったまま周囲をぐるりと見わたした。すると、ガスレンジのそばの天井近くにある火災報知器の小さなランプが何やら赤く光っているのではないか。「そうですか。確かめてみます」と言ったあと、私はお礼の言葉を口ごもりながらそそくさと電話を切った。そして立ち上がり、火災報知器を改めて見つめた時、その丸い小さな装置は「電池切れです! 電池切れです!」と急かすような声を発した。ガスレンジが電池切れを起こしたのだと早合点した私の耳と頭は、警告音やアナウンスがガスレンジから発せられているという思い込みを、その瞬間まで訂正できなかったのである。

以上の失敗はどちらも、思い込みが深刻な結果をもたらすものでなかったのは幸いだったが、思い込みのこわさを物語るものではある。そのこわさは、人間が思い込みを抱きがちということだけではなく、それを訂正することが難しい点にあると思う。初めのエピソードでは、ホテルマンに指摘されるまで私は自分の思い込みに気づけなかった。後のエピソードでは、コールセンターから「ガスレンジ以外の機器から音が出ているということはありませんか」と言われてもなお、私は自分の思い込みにとらわれたままだった。あな、おそろしや。

ともあれ、ここで紹介したのはなんとも恥ずかしいかぎりの失敗談だが、今となっては笑い話である。恥ずかしくなるような失敗を時にやらかしてしまうのは人間の弱みだろうが、そんなことも笑い話にできるのは人間の強みかもしれない。

## 連載ミニエッセイ 14

### 顔を覚えること

私は人の顔を覚えるのが苦手である。それを自覚した最初は中一の時だった。

小学校は僻地にあり、同級生は十人しかいなかった。そのため、私たちの学年はいつも一つ上の学年か一つ下の学年と一緒にいる複式学級に組み込まれた。一人の担任が同じ教室にいる

二つの学年を交互に教えるのである。このように私はごく少人数の中で小学生時代を過ごした。

中学に上がると事情ががらりと変わった。一学年が四クラス、一クラスが三十数人になったのである。同じ小学校から来た同級生がクラスに一人しかおらず、ほかのクラスメートは知らない人ばかり、というところから私の中学生生活は始まった。

当然、日が経つにつれてだんだんとクラスメートの名前と顔を覚えていったわけだが、だいぶたってからも、ある二人のクラスメートの区別がつかなかった。その二人をA君、B君とすると、目の前の子がA君かB君のどちらかであることはわかるのだが、そのどちらなのかが判別できないのだった。二人の見分けがちゃんとつくようになったのはゴールデンウィークの後ごろだったような気がする。つまり、三十数人のクラスメートの顔と名前を覚え切るのにひと月ほどもかかったわけである。似たようなことをその後も何度か経験し、自分は人の顔を覚えるのに苦労するたちなのだと知った。

人の顔を見分けにくいだけでなく、同じ人であってもヘアスタイルが変わると同一人物と認識しにくいし、顔の角度や表情が違えば別人と思うこともある。また、テレビドラマを見ている時、顔立ちが似た別々の俳優を同一人物だと勘違いすることもある。

そんなわけで、大学の教員をしていた時、学生の顔を覚えるのに時間がかかった。授業中に指名して発言を促そうとする時、「〇〇さん、今のことについてどう思いますか？」と言いたいのだが、名前と顔が一致していないため「はい、あなたはどう思いますか？」というように固有名詞を使わず指名せざるを得ない期間がしばらくあった。いちばん困ったのはコロナ禍の時である。学生たちがみなマスクをしていて目もとしか見えないため、なおさら顔を覚えにくかったからである。学生を当てるとき、名前を間違えたこともあった。

相貌失認という概念がある。相貌とは人の顔立ちのことで、相貌失認とはそれをうまく認識できないことを言う。顔の認識に関わる障害の一種である。私のは障害の域にまでは達していないと思うが、相貌失認的傾向があるのは間違いない。

顔の認識に難があるのは、視覚情報を処理する脳の機能がうまく働かないからであろう。このような特徴があるため、私はたとえば将棋が苦手である。将棋は、目の前の駒の位置を正確に認識するだけでなく、何手か先までの駒の動きを映像として頭に思い浮かべなければならないが、私にはそういうことができない（ただし、五目並べならどうにかなる）。脳の情報処理機能に関して、人は大まかに視覚情報優位型と聴覚情報優位型に分けることができると思うが、私は文句なしに聴覚情報優位型である。

私は、カウンセリングという、目には見えない「心」を扱うことを専門に選んだ。カウンセリングはまた、話を「聞く」ことが中心である。視覚情報の処理に少々難があり、聴覚情報の処理には（たぶん）特に問題がない私に、それは合っていると思う。相貌失認的傾向があるか

らその道を選んだというのではなく、結果的にそうっただけの話だけれども。